広島大学　学部・附属学校共同研究機構研究紀要
〈第37号　2009．3〉

自分たちの音楽を創り上げる音楽学習の開発（５）

― 音楽科の「協同的創造力」の育成をめざして ―

桑田　一也　　青原　栄子　　大橋美代子　　三村　真弓
濵本　恵康

１．はじめに

昨年，文部科学省が新学習指導要領を公示した。小学校は2011年度，中学校は2012年度から完全実施される。教育基本法の改正後，初めての改定となる指導要領では，「生きる力」の育成という従来の理念は変えないまま，授業時間，学習内容を増やすという考えだ。理解力や表現力などを養う言語活動，理数教育，伝統・文化教育，道徳教育，体験活動，外国語教育の充実が柱となっている。教育基本法改正で，新たに教育の理念となった「伝統・文化の尊重」「公共の精神」を反映させるものと考える。ちなみに音楽科では，「伝統・文化の尊重」という視点から，日本音楽を学習内容としてとりあげていくことに改善の余地がありそうだ。教育界を見渡す中で，混沌とする様相は今も否めない。しかし，「生きる力」の一部として「豊かな情操を養う」という一翼を担った音楽科では，これまで以上に真摯に向き合った実践を行うべきだと考えている。そこで，本学園の柱のひとつである「協同的創造力育成」にも着目し，題材開発することを試みる。具体的には，箏，リコーダー，歌唱，小楽器に着目し，日本音楽をアンサンブル活動させる取り組みを行った。本論文では，その実践の一部を紹介する。

２．これまでの取り組みをふり返って

私たちの学園は，文部科学省の研究開発学校としての取り組みを進めて６年目となる。その中で，異校種異学年交流，日本音楽，創作，をキーワードに音楽科の協同的創造力育成のための題材開発を進めてきている。昨年度は，箏とリコーダーでのアンサンブル活動に創作を付加することで一定の成果を上げることができた。今年度は，歌唱に重点を置き，これまでの取り組みを発展させることとする。

３．今年度の取り組みの方向性

学習指導要領の改定に伴って，音楽科では「歌唱」「器楽」「創作（小学校では「音楽づくり」）「鑑賞」の４つの指導事項が示された。特に音楽科では，日本音楽を意識させたり，創作させたりすることが指導内容として重点的に扱われなければならない事項となった。そこでこれまでも重視してきた目標ではあるが，改めて「豊かな情操を育てる」ことについて考えてみることとした。

まず相対性理論を発見したアインシュタインの言葉「感動することをやめた人は，生きていないのと同じことである。」を想起した。そしてそれを裏付けるように脳科学者の茂木健一郎は，「今私たちが生きているこの世界。その中でいろんな物事に目を向けて，新しい見方を得ていく。それこそが『感動』であると思います。そのために必要なのが創造性です。人間は創造的に生きることで，『感動』という人間にしか味わえないものを手に入れることができるのです。」(1) と言っている。また，「こうした創造性の源となるものは何なのか。私は『意欲』であると思っています。意欲さえ持っていれば，どんどん創造力はついてくる。そして脳の機能もまた，意欲を持つことで高まっていくと考えられるのです。」(2) とも語っている。

つまり，新たなものを創造することで子どもは意欲的に取り組み，その結果自分たちがつくり出す音楽に感動することで豊かな情操が育成されるのではないかと考えたのである。それを今年度の研究の柱として，次のように研究仮説を立てた。

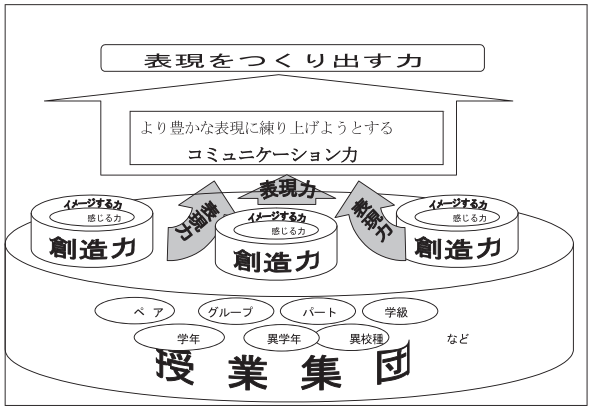
Kazuya Kuwata, Eiko Aohara, Miyoko Oohashi, Mayumi Mimura, Yosiyasu Hamamoto, ：Development of music Learning to Develop Student’s Ability to Express Themselves（５）Study to Improve Cooperative Creation in the Music Department.

４．研究の仮説

「異校種異学年交流」というスタイルで学習を進めることで，お互いに新たな考えを知ったり，よさを分かち合ったりすることで，意欲的に自分たちの音楽を創造することができ，それが音楽を作り出すことへの喜びへとつながる協同的創造学習になるであろう。

５．「協同的創造力」を支える５つの音楽的な力

本学園の考える音楽科の「協同的創造力」を支える音楽的な要素は，①コミュニケーション力　②感じる力　③イメージする力　④創造力　⑤表現力　の５つで構成されるものとする。子どもたちが，感じる力やイメージする力や創造力を基に，音楽的コミュニケーション力を生かして協同しながらより豊かな自己表現をする過程をイメージ図として記すと次のようになる。



図ー１　音楽科における「協同的創造力」イメージ図

６．音楽科における協同的創造学習

本学園における「協同的創造学習」の捉えは，「子どもたちが協同しながら，既存の教科学習で学んだ力を土台に，新たな文化を創造・開発していくような力を育てる学習」である。それを受けて音楽科では,「集団で表現をつくり出す」過程をいい，個々が抱いている既存の音楽的価値観を集団の中で練り上げ，新たな音楽（文化）をつくり出す過程をいう。

その過程のなかで特に配慮する点は，子どもたちが各々で感じる多様な音楽的価値観を，コミュニケーション活動を通してすり合わせていく際，自分の思いや表現を人に押し付けるのではなく，お互いにもっている「よさ」を共有し合い，それをともに表現することに意義があると考えさせることである。「こんな感じ方もあるんだね」「こう表現すれば音楽がもっと豊かになるんだね」とお互いに認め合い，表現を広げていこうとする姿を目指している。言い換えれば，協同作業を通して子どもたちに培われる他者を意識する思いを土台に，子どもたちの感性および表現力を高めていくことである。子どもたちは，音楽の授業などを通じて協同的に表現するなかで，お互いの思いや表現の特長に気づき，それを学び合うことで共に高まり合う。その結果，子どもたちの個としての音楽的能力も伸張されるという相乗効果をねらっているのである。

７．「協同的創造力」の評価について

本学園音楽科が考える「協同的創造力」は,「自分たちの感じる音楽をイメージ豊かにふくらませながら，協同作業を通して，積極的につくり出したり表現したりする力」であると説いた。この力を評価するための方法を次のように実践している。

①学習のねらいと評価の規準を明らかにする。
②自己評価できやすいような規準を設けるようにする。
③実際にやっている過程やその様子を評価したり，それをフィードバックして改善したりする様子を評価する。
④子どもたちが練り上げてつくり出した発表を大事にする。

①②については，次のような評価表をつくって子どもたちが自己評価できるような仕組みにし，本時の授業について真摯にふり返ることができるようにしている。

評価表の例

７年生　音楽科　授業評価表　１１月２２日（金）
組　番　名前（　　）

１．学習課題

７年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイディアや意見を出し合おう！

２．本時の評価（3段階で自己評価をしよう！あてはまるものに〇をつけよう！）

	A	B	C
７年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイディアや意見を出し合おう！	７年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイディアを出して演奏することができた。	７年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイディアを出すことはできた。	７年生が協力して「つくろう！オリジナル『さくらさくら』」のアイディアを出すことも演奏もできなかった。

③については,「練り合いの場面」を協同的な場面と位置づけて観察法（それがＴＴであればさらに効果的と思われる）や各時間のワークシートのふり返りから見取ることができるようにする。観察法においては，表現が高まるための意見をより多く出そうとしている姿や協同して話し合いを進めている場面を指導者によりチェックできるようにしている。

④については，ワークシートによる自己評価や他己評価，また指導者によるアドバイスや客観的評価ができるようにする。ワークシートには，練り上げるときの様子とともに本時の演奏について子ども自身の思いを率直に書かせるように促すようにする。また，中間発表など他者に演奏をきかせることで，客観的な意見やアドバイスを取り入れることで協同的に高まる場を設けることも必要とする。さらには，教師による支援や演奏をビデオに撮ってそれを客観的に視聴することでグループのねらいに合った表現に迫れているかをふり返させたり，異学年・異校種の子どもたちにきかせることで違った視点からの意見をきくことでふり返させたりする場面を設けるようにする。

このようにして協同的な学びの場面に焦点を当てて「協同的創造力」をはかる手だてを施すわけであるが，「最終的には協同して子どもたちがどのように変容していくのか」を全題材通して見取る必要があると思われるし，そのための記録を残すことができるようにする手だてを考える必要がある。

８．授業の実際

○小中合同授業の実践

―４年生と７年生の実践を通して―

（1）合同授業の中で「協同的創造力」をどう育むか

「自分たちの表現をつくり出そうとする力」を支える５つの要素を本題材の中でどのように育んでいくことができるか，をそれぞれの要素について述べていく。

１）コミュニケーション力

通常の授業と合同授業の大きな違いは，自分たちの表現を「クラスの中で練り上げるためのコミュニケーション」と「異校種・異学年で練り上げるためのコミュニケーション」ということになる。前者もクラス内でパート，小グループなど，子どもたち同士がかかわり合いコミュニケーションととりながら自分たちの表現を練り上げるという点では変わりないが，とかくかかわりが異校種・異学年ということになると普段の授業とは違う独特の緊張感がみなぎってくる。低学年の子どもは，高学年の子どもとかかわることで自分たちが持っている知識や経験とは高次な次元で課題について解いてくれることへのあこがれの念が期待できる。また，高学年の子どもは，低学年の子どもとかかわることで，これまで学習していることであっても忘却していることを再度思い起こさせてくれたり，凝り固まっている既成の概念を切り崩して斬新な思いを呼び起こさせてくれたりということも期待できる。そういった均衡の中での異校種・異学年での学習は，音楽を介してコミュニケーション力を高めることを予想させるのである。

２）感じる力

本題材は，日本古謡「さくらさくら」の旋律を用いることで「日本的な旋律」を子どもの感性にアピールすることが容易であり，「さくらさくら」を箏やリコーダー，歌で演奏するとともに，「日本的な音って？」と日本人ならではの心の機微へと発展させることも可能であると考える。

３）イメージする力

日本の四季のなかでも桜が咲く春の情景を子どもなりにイメージを広げ，それを「さくらさくら」の旋律とともに演奏し，さらにはその旋律を引き立てるためにはどのような手段をとればより個性的で子どもたちのイメージする音楽になるのかを考えさせることは意義深いと考える。そのための具体策のひとつとして，イメージビデオ的な桜のＤＶＤを見せることで，個人のとらえをふくらませ，グループ活動の話し合いに活かせるように準備させる。それをもとに，実際の音に結びつける活動をさせるわけだが，西洋的音楽の環境にどっぷりと浸っている現代の子どもたちが「さくらさくら」の旋律をもとにどのような情景を演奏したいと考えるのか興味深い。

４）創造力

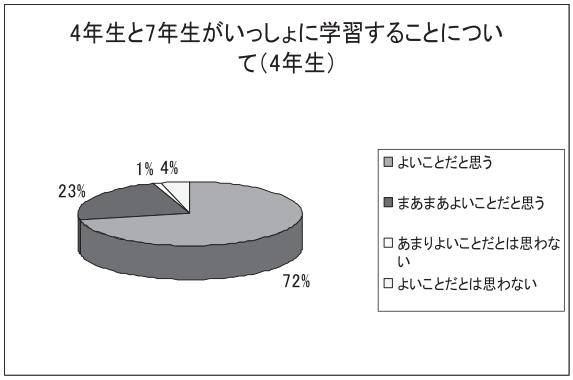
子どもたちがイメージを広げ，さらなる工夫をめざすことで育成していく「創造力」は，「どのようなアレンジで演奏すればよいか」いう点で培いたいと考える。今回は，「歌」のアレンジに重点を置いて取り組みを行う。「さくらさくら」の旋律をもとに，「つなげる」「重ねる」「追いかける」「かざりをつける」「リズムを変える」ということをキーワードにして，それを実際の音につなげるようにする。また，その構成力が問われるが，合同授業ということで，７年生がリードして思いをまとめたり，教師が支援に入ったりすることで音楽づくりを進めたい。

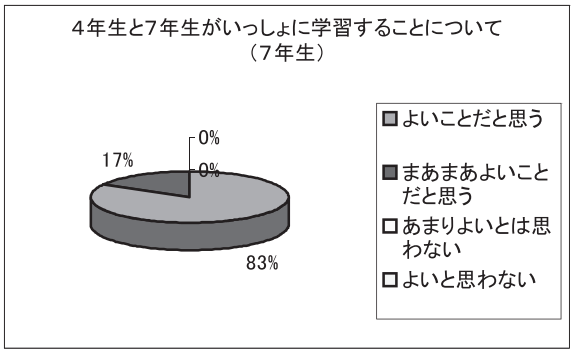
５）表現力

「豊かな自己表現力」が求められる「表現力」は，合同授業とは別の各学年で奏法の基礎基本などを定着させてから合わせることが効果的であると考える。例えば，箏の奏法やリコーダーの奏法が身に付いていない状態で合同の演奏したところで子どもたちの表現を追究することにはならないからである。そして，合同で演奏する際には，お互いの音をよくきき合うなかで，合図の出し方ひとつをとっても高学年のリーダー性が問われるわけでどのような音楽をつくりあげたいのか？というゴールのイメージを持たせてともにつくり上げていく楽しさや喜びを感じさせながら表現に結びつけていきたいものである。

（2）合同授業に向けて

合同授業に向けて，その期待度についてアンケート調査を行った。結果は次の通りである。





４年生は，72%の子どもが「よいことだと思う」と肯定的に評価している。その背景には，「こんな機会は滅多にないから」「中学生さんといっしょに学習してみたい」「年上の人に教えてもらうとよく分かるから」と合同授業への期待があるようだ。

７年生は，83%の子どもが「よいことだと思う」とやはり肯定的に評価している。「それぞれどのような学習をしているかわかるから」「それぞれ学習した知識を生かせるから」「お互いのよさを交流に生かせるから」と答えている。

また，「いっしょに学習することでどのようなことが学べると思うか？」という問いに対しては，次のような回答であった。

【４年生】

- 自分たちが分からないことや知らないことを教えてもらえる。
- 箏の弾き方やコツを教えてもらえる。
- 歌うときのお手本になる。
- 知らない人と仲良くなれる。

【７年生】

- 相手の音をききながら音を合わせること。
- 協力する力。みんなで合わせる力。
- 交流することのよさが実感できる。
- 新しいさくらさくらを発見できると思う。
- ４年生さんに箏がどんなものか知ってもらうことができる。

４年生は年上の学年に学習の支援と知識の習得や技能の向上を期待していることが分かる。また，「仲が深まるから」「知らない人と仲良くなれる」と，幅広い人間関係の中でかかわるよさを期待する者もいる。

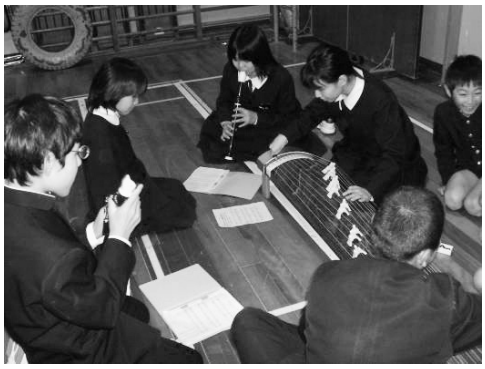
７年生はこれまでの経験から音楽的構成要素についてあげている回答もあり，これまで別々に行ってきた表現の基礎基本を定着させると共に，協力して合同で音楽を演奏することで素敵な音楽を表現できるのではないか？という期待感を持っていることが伺える。

（3）４年生と７年生の授業の実際

４年生は合同授業までに，「さくらさくら」とヴィヴァルディのヴァイオリン協奏曲集『四季』から「春」の第１楽章，藤井凡大の「箏独奏による主題と六つの変奏さくら」を聴き比べ，日本の旋律を感じ取り歌唱表現ができるようにすることと，箏に関心を持たせるようにした。また，ＤＶＤや写真を使って桜が咲いているイメージを膨らませて合同授業に臨んだ。７年生も同じＤＶＤを使ってイメージを膨らませ，箏とアルトリコーダーのそれぞれで「さくらさくら」の２重奏ができるようになる状況で合同授業を迎えた。

１）お互いが学習してきたことを交流

グループは，事前アンケートなどを参考に教師の方で編成する。４年生と７年生各学年４名ずつの計８名で，箏の数と同じ10のグループとなる。初めての合同授業では，まず自己紹介をして緊張感をほぐすように心がける。そして，これまで単独で学習してきた内容を紹介し合わせ，「これからどのような合同アンサンブルを作っていくのか」見通しが持てるように，モデル演奏の映像を視聴したり具体例を提示したりしてアイディアや意見を出し合う時間とした。



２）情景からイメージをふくらませて

続いてモデル演奏をきかせたり，例示を模造紙で示

したりすることでこれからの活動の見通しを持たせるようにした。そして，各グループでどのような「さくらさくら」を演奏したいか，イメージをふくらませるためにその情景を文章で表すことと歌の創作のアイディアを出し合い，創作することができるように学習を進めた。

＜例＞

○たくさんの桜が舞い散るような情景をイメージして演奏したい。 ○桜が満開で暖かい感じ。みんなで花見をしているような情景をイメージしたい。 ○箏がもつ「和」と「桜」が合うように演奏したい。

３）合同授業を進めるための視点

指導としては，情景描写のイメージ化から①「主旋律と副旋律をどのように組み合わせるか」②「その演奏スタイルの確立」③「イメージに近づけるための創作部分」を考えさせた。そのために，学習してきたことをお互いにきき合う場面を設定したり，モデル演奏を提示したりしながらイメージがふくらむようにした。また，７年生は音楽を練り上げるためのリーダーとなり，４年生とともにしっかりとコミュニケーションをとることができるように授業者２人が意思疎通を図りながら支援できるようにした。このような過程の中で，自分とは異なる考えにふれて新たな考えや技能，より高い価値を獲得して一人ひとりの思考や表現を深めていくことができるような協同的創造学習を進めていった。

４）合同授業を進める中で

「７年生がリードしながら」と促してはいたものの，「４年生が言うことをきかない」とか，「７年生自身が遊んでしまう」などという葛藤や自省を繰り返しながら進められた。そうした中，４年生から「トライアングルを入れたらどうか」などのアイディアが出て，歌だけではなく楽器を入れることでイメージをさらにふくらませることができるようにするグループも出てきた。

５）合同授業のふり返りから

【４年生】

・７年生さんと初めて交流しました。ちゃんと「さくらさくら」を歌えるか心配だったけど,「良かったよ。」と言ってくれました。でも，次はもっと大きな声で歌いたいです。７年生さんと仲良くなりました。

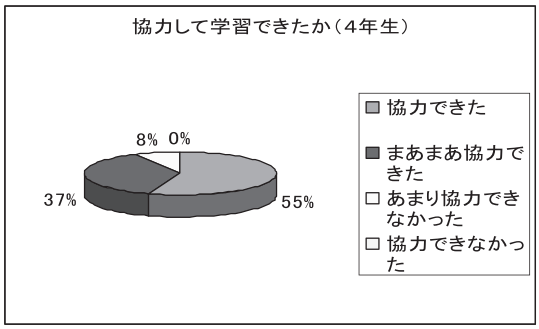
【７年生】

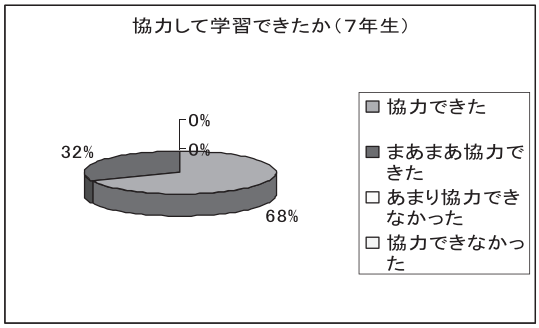
・今日は４年生さんと交流をして，自分でもびっくりするくらい緊張してしまいました。アルトリコーダーを演奏する時も，少しふるえてたし，ミスってしまいました。４年生さんもはずかしかったのか，なかなか歌ってくれず,「もう少し上手にリードできたらよかったなあ」と思いました。でも，班のメンバーとは仲良くなったし,「さくらさくら」もよい雰囲気で進めていけたので，この調子でがんばりたいです。

９．成果と課題

計５回の合同授業を進めるなかで自分たちの音楽を練り上げ，発表会を迎えることができた。発表会後には，合同授業についてのふり返りを行った。

※グループで協力して学習を進めることができましたか。

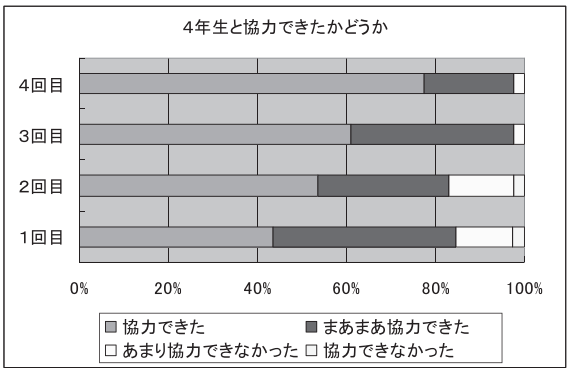




この項目について,「協力できた」「まあまあ協力できた」と答えた子どもは，７年生が100％，４年生が92％であった。「さくらさくら」の発表会に向けて協力しながら新たな音楽（文化創造）をめざした様子が伺える。

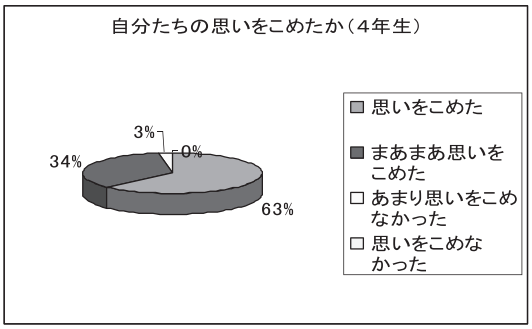
また，７年生が４年生をリードすることを促しながらしながらこの学習を進めたが，回を重ねるごとに協

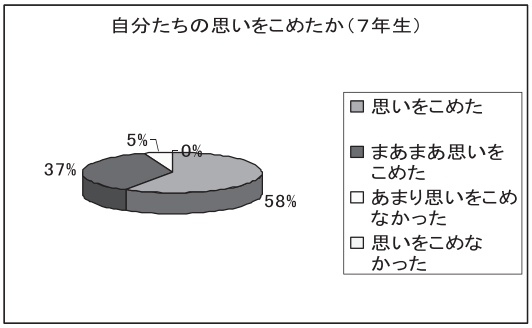
力しようとする思いは強まっていった。それを示すのが次のグラフである。



これは，グループでお互いに気心が知れてくるということと共に，自分たちのイメージに合った「さくらさくら」をつくりあげたいという７年生と４年生の思いが合致した結果，「協力できたか」というデータが上がっていったと思われる。以上のことから子どもたちは「協力・かかわり」をもって学習に取り組めたと言える。

最後に「『自分たちの思い』をこめた『さくらさくら』を演奏することができたかどうか」についてのグラフを示す。





「自分たちの思いをこめたい」ということは，自分たちで新たな文化創造をめざそうという子どもたちの姿の現れだと考える。既成の旋律をただ演奏するというわけではなく，自分たちのイメージからアレンジした「さくらさくら」を演奏したいという思いが高まった演奏ができたと子どもたちが実感していると思われる。

そして，それを裏付ける子どもの記述が次の通りである。

【４年生】

・４年生と７年生でちがうイメージをそれぞれ持って，そのイメージを組み合わせて新しいイメージをつくることができて「いいなあ」と思いました。７年生さんは「箏」で４年生は「歌」で学習してきたがしっかり生かされていて，年の差があるとまたいい学びができることを知ってよかったと思います。

【７年生】

・それぞれが今まで学習してきたこと，その学年しかない発想を生かし，オリジナルの演奏ができたと思います。４年生さんの発想はとても広がりのあるようなもので，７年生も助けられました。私は，この学習を通して「音楽」の可能性を学びました。「音楽」というものは自分たちの手で，自分たちの心で創りあげていくものだということです。発表も成功したし，他の班のよさというものも発見できました。

以上のことから子どもたちは「新たな創造」をめざして学習に取り組めたと言える。

ただ，合同授業となると大人数で学習を進めなければならないというデメリットもあり，単学年で個々の基礎基本の力をしっかりと身につけた上で合同授業を行わなければ，効果的に学習を進めることができないこともこれからの課題として受け止めている。

引用文献

１）茂木健一郎（2007）「感動する脳」ＰＨＰ pp.21－22.

２）茂木健一郎（2007）「感動する脳」ＰＨＰ p.25.